

学校関係者評価委員会における意見等

1 情報モラル教育と家庭の役割

(1) 家庭との連携による意識改革

スマートフォンの不適切な利用は、学校側の指導だけでは解決が難しい。親が主体となって「そのような使い方は良くない」と教え、子供自身が「自分たちの使い方はダメなんだ」と自覚できるような啓発活動を、家庭と学校が一体となって進めるべきである。

(2) 「人間力」の重視

ICTやAIはあくまで道具であり、それを使うのは「生きた人間」である。道具を正しく使いこなすための土台となる人間力を、本校の多様な教育活動を通じて養うことが重要である。

2 「なりたい自分」を描く力の育成

(1) 自己調整学習への転換

決められた時間や量をこなす学習から、自ら課題を見つけ、見通しを持って学びを構成する「自己調整」の力が必要である。今の生徒は「なりたい自分」をイメージすることが苦手な傾向にあるため、その具体的な姿を自分の中に描かせる支援を強化すべきである。

(2) 憧れの存在としての高校生

小中学生にとって、本校の生徒は「憧れの存在（目標）」になり得る。交流活動を通じて、中学生が「自分もこうなりたい」と思えるような機会を今後も積極的に提供してほしい。

3 戦略的な学校広報と地域交流

志願者確保に向けた、本校の強みを活かした戦略的なアプローチが提案された。

(1) 音楽活動を核とした売り出し

吹奏楽が盛んな特定の地区の小中学校を訪れて合同演奏を行うなど、本校の強みを具体的に地域へ「売り出す」工夫をさらに進めるべきである。

(2) 誇りを持てる校風の維持

卒業生が社会に出た際、本校の出身であることを「胸を張って言える」ような学校生活を送られていることが評価されており、そのブランド力を大切にすべきである。

4 芸術系才能のキャリアパスと地域還元

(1) 鹿児島で「食べていける」場の創出

専門教育を受けた優れた才能が、大学進学後などに鹿児島に戻り、芸術を糧に生活していける職域や場を創出することは、地域社会や大人の責任である。

(2) 専門機関との双方向の連携

美術館等の専門機関との関係において、単なる見学に留まらず、若者の感性を活かした企画への参画など、より双方向で密な連携を模索すべきである。

5 学校運営および手続きへの評価

(1) 教職員への高い信頼

職員自身の自己評価が高く、それが熱意ある指導として生徒の成果に直結している点が高く評価された。

(2) 大学入学共通テストのWEB出願の利便性と責任感

今年度から導入されたWEB出願は「保護者の立場から見て非常に楽だった」と肯定的に捉えられている。一方で、生徒自身に手続きの責任を持たせる姿勢も重要である。